

世界史ふれあい街歩き 開封と臨安

岸本 次司

街歩きの楽しさ

NHKの番組に「世界ふれあい街歩き」がある。視聴者が「自分で街を歩いている」ような感覚を体験できるよう趣向をこらしていると聞く。筆者もよく観る。すでに行ったことのある街はもちろん、たぶん行くことはないであろう街を充分楽しむことができるからだ。

前任校では毎年台湾への修学旅行をおこなっていた。旅程の1日は必ず班別の自由行動。現地の大学生がつきそい、台北の市内をめぐる。生徒たちは事前学習で見学プランをつくる。ガイドブックをにらみながらたずねたい場所を選ぶ。名利もあればグルメスポットもあり、仲間とワイワイやりながら練り上げる。そして本番。たいていの生徒は事前のイメージとのギャップに当惑しつつ、とても面白かったと感想を述べる。とにかく街歩きは楽しい。

さて、世界史学習でも街歩きができないものだろうかと考えてきた。過去の都市を直接訪れることはできない。あくまでもバーチャルな体験ではあるが。ちなみに新学習指導要領解説では「C 諸地域の交流・再編」の「都市の発達」という一項で「都市の景観や都市計画に関わる資料」を用いて「都市の立地や規模、都市の機能、都市やその周辺に暮らす人々の生活などを考察」するとしている。街歩きせよといっているかのようではないか。

12世紀の開封を街歩きする

そこで『新世界史』(世探706)の「資料から考える

「清明上河図」と宋代の庶民生活」(p.117)を使い、北宋末期に繁栄を極めた徽宗時代の都開封をたずねてみることにした。

ここで頼りになるガイドブックがある。教科書でも紹介した『東京夢華録』だ。著者の孟元老については、巻頭の自序によると1103年に役人であった父の転勤で開封に来て、その後成人もむかえ、靖康の変の翌年(1127年)に南へ脱出するまで、繁栄の極にあった都での生活を満喫したらしい。そして20年がたち、ありし日の楽しさが偲ばれるとともに、旧都の栄華が忘れ去られるのが嘆かわしく、この書物を書くことにしたという。この時、年齢60歳前後であったと推定される。

その内容は、大きく3つの部分からなる。第一は街中の建物や名勝地などについての地理的説明。第二は宮中や民間の年中行事に関する説明。そして第三が市民の風習や生活の諸相を描写した部分。もちろんもっとも興味深いのは最後の部分である。

【授業実施上のポイント】

『東京夢華録』を取り上げる際、著者がかなりあとになって(20年以上たって)開封での暮らしを回想してこれを執筆したことを忘れずに紹介してほしい。その生き生きとした描写から、とすると同時期のルポルタージュと思われがちなので要注意。あくまで20年という時を経た、著者の胸に去来する郷愁に満ちた風景なのだ。

そしてもう1つ頼りになる資料がある。『清明上河図』だ。今回『新世界史』では2次元コードを使って拡大してみることができるようになってい

る。まずじっくりと味わってほしい。

この『清明上河図』、謎が多いことも確かだ。「資料から考える」で紹介した場面が具体的に開封市内のどの場所の描写であるのかを特定することが難しいのだ。よく話題になる虹橋のシーンもそうだ。ちなみに『東京夢華録』は虹橋についてこう述べている。

東の城壁の水門の七里外から、西の城壁の水門の外まで、この河にかかる橋は十三ある。東水門の外七里の所にある橋を虹橋という。この橋には橋脚がなく、すべて巨大な材木を使ってアーチ式に架橋し、^{あか}朱い塗料で飾りたてたところは、ちょうど空に虹がかかったようである。

(『東京夢華録』「巻一」 p.36)

つまり虹橋は城壁の外、街の郊外にあったことがわかる。作中の扱いからすれば街の中央にあったと思いがちだ。だからといって、『清明上河図』全体の信憑性が失われるものではない。『清明上河図』は開封市内の特定の場所を描写したというより、賑わう開封の様々なパーツを寄せ集めて作り上げた一大絵巻ととらえるべきだろう。『東京夢華録』を手掛かりに街歩きに出かけていこうとする生徒にとって『清明上河図』が多くのヒントを与えてくれるであろう。

学習活動

授業のねらいは「開封の街歩きベストコースを選ぼう」とする。班ごとに散策コースを作り上げ、それを発表してどれが面白そうか全員の投票で優秀作を選ぶという趣向である。

つぎの①～③の資料を用意する。①教科書『新世界史』。つぎに②『東京夢華録』のダイジェスト。②のなかでお勧めはつぎの各箇所である(ページ数は平凡社、東洋文庫版による)。

- (1) 御街(メインストリート)の説明(「巻二」 p.63)

- (2) 朱雀門外の町々(「巻二」 p.70)

- (3) 州橋の夜市(「巻二」 p.73)

- (4) 東角楼の町々(「巻二」 p.78)

- (5) 馬行街の商店(「巻三」 p.125)

その他、商い全般についてはつぎの各部分が参考となる。

- (6) いろいろな小商売(「巻三」 p.140)

- (7) 食べもの店(「巻四」 p.163)

- (8) 肉の市(「巻四」 p.167)

- (9) 餅(ピン)の店(「巻四」 p.168)

- (10) 魚の市(「巻四」 p.170)

これらの資料はプリントにしてもよいが、量が膨大なので、データ化して生徒個々のタブレットなどで閲覧できるようにする(その場合は、授業目的公衆送信にあたるため、SARTRASから補償金の支払い手続きが必要となる)。

【授業実施上のポイント】

ここであげた箇所はあくまで参考と考えていただきたい。これ以外にも使える記述は多い。授業者として開封のこういった側面を生徒たちに気づかせたいかにより、自由に選ぶべきだ。また、本文はもちろん注釈の部分もいっしょに紹介するとよいだろう。この注釈一つひとつが(とくに食べ物の説明など)実に面白く、生徒の興味関心をかきたてるに違いない。

さらに③開封市街地の地図(図)。「資料から考える」にも市街図を紹介しているが、これは内城だけの地図なので、より詳しいものがあると生徒たちも助かるだろう。

つぎに班編成について、人数は5～6人が適当だろう。資料がかなり膨大なので(1)から(10)までを各自2つずつ担当し、内容をほかのメンバーに紹介するという流れが理想的と思われる。

いよいよ授業開始。一応「宋代の政治」(『新世界史』 p.115～116)の説明が終わったあたりが実施の好機であろう。最初に「資料から考える」(p.117)

権利の都合上、紙の冊子のみでの
掲載とさせていただきます。

図 宋代開封府概略想定図(『東京夢華録』p.27)

をみながらこれからの学習のねらいを説明する。
ここで2次元コードを使い『清明上河図』をたずね
てみるのもよいだろう。それだけで生徒たちはワ
クワクしてくるはずだ。

そして班編成と、タブレットを使った『東京夢
華録』の検討、コースの策定という流れで進めて
いく。さらに各班のコースがほぼ完成した頃を見
計らって結果発表会と優秀作の選定となる。開封
の街歩きもこれで一段落となる。

さらなる課題

こういう経験はないだろうか。ある街(国内外
を問わず)を旅するとして、まずは定石通りガイ
ドブックに示された名所旧跡をたずねてみるだろ
う。場合によっては団体ツアーに参加するかもし
れない。その結果、その街が大いに気に入って再
びそこを訪れてみようとなった時、前回味わえな
かったものに挑戦したくなるのが人情ではないか。
そして大抵の場合、もっと現地の人とふれあいた
い、そこでの暮らしを実感したいと考えるのでは

ないだろうか。

前半の学習はまさに最初の旅というべきもので
あった。開封の賑わいはかなり味わえたと思う。
しかし、人々の暮らしぶりについてはどうだろう
か。たとえば高級官吏はどのようにしてその地位
を手にしたのか、商人たちは日々どんな組織のな
かで活動をしていたのかなど、新たな疑問が浮か
んできたはずだ。後半ではそうした人々の生きざ
まにより深く迫ってみたい。「ふれあい街歩き」を
極めていこう。

臨安をたずねる

ここで舞台は南宋の都臨安へと移る。なぜ臨安
か。その理由は1つ。この街には人々の暮らしぶ
りを今に伝える格好の資料が残されているからだ。
その文献の名は『夢梁録』。呉自牧の作と伝えら
れるが、杭州の人であるらしいこと以外何もわか
っていない。その成立時期についてもいくつかの異
説があるが、南宋が滅びたあと、しばらくたって
元代にできあがったことは確かなようだ。南宋滅
亡の時、呉自牧はたぶん20歳前後だった。その後、
異民族支配下治下の杭州で生き続け、1334年以後
かなりの高齢で世を去ったと考えられている。そ
の間(60年ほど)呉自牧がどのような生活をしてい
たかはまったく不明であるが、ある時期から南宋
末の臨安の姿を『東京夢華録』同様の、いやそれ以
上に充実した内容で後世に残しておこうと企
図し、それを実行に移したことは間違いない。

臨安の街中の、むしろ貧しい庶民に生まれた呉
自牧は、エリートコース(幼児から科挙のための
教育を受け教養豊かな士大夫官僚になる道)とは
縁遠かった。しかし、何かのついで、幼い時に宮
城に入ることができたらしい。当時何百人もいた
という宦官候補の少年の1人だったのではないかと
推測される。呉自牧少年は外回りの雑役をつと
め、女官のお供で買い物に連れていかれたことだ
ろう。そうした日々は1276年モンゴル勢力による

臨安陥落と皇族たちの拉致(大都へ)によって突然終わりを告げた。つづく元朝支配下の杭州(臨安)をマルコ＝ポーロは最大級に賞賛しているが、呉自牧の目には日々凋落の一途をたどる悲しい旧都としか映らなかったに違いない。呉自牧はありし日の臨安の賑わいはもちろん、そこで繰り広げられた日々の生活を克明に描いた。そこがガイドブック的な『東京夢華録』との違いである。街も人も、当時あったことすべてを洩れなく記録した壮大なリファレンス。それが『夢梁録』なのだ。

後半のアクティビティと授業の流れ

人々の生きざまを紹介するためには、それに適したアクティビティが必要となる。ここで紹介したいのが、「なりきりプレゼンテーション」だ。ある歴史上の人物に「なりきって」プレゼンテーションするのだ。それをおこなうためには選んだ対象に興味をもち主体的に調べることが欠かせない。「なりきりプレゼンテーション」とは、そうした一連の学びを指している。授業の流れは、①説明と班(グループ)づくり、②リサーチワーク、③ディスカッションと発表準備、④発表と相互評価、となる。

まず、どのような人物について取り組ませるか、授業者が大枠を示さなければならない。本文中の注目すべき箇所を選び、その内容を1人の人物に語らせていくのだ。

ここで提案したいのがつぎの6人である(ページ数は平凡社、東洋文庫版による)。

- (1) 科挙を受験した男性(「巻二」 p.80、「巻三」 p.148)
- (2) 夜回りの役人(「巻十」 p.156)
- (3) 外洋船の船員(「巻十二」 p.246)
- (4) 同業組合に属する商人(「巻十三」 p.262)
- (5) 夜市の客(「巻十三」 p.286)
- (6) 生活困窮者(「巻十八」 p.262)

このなかでも是非取り上げたいのが(1)科挙を受

験した男性と(6)生活困窮者だ。

まず(1)だが、科挙については『新世界史』 p.119にコラムを設けている。しかし、科挙が本格化した宋代にそれがどのように実施されたかについては疑問が残るであろう。そこで『夢梁録』の出番となるのだ。「巻二」では礼部により臨安でおこなわれる省試が、そして「巻三」では皇帝がおこなう殿試と合格発表の様子が克明に描かれている。これらを検査することで試験本番での受験生の行動はもちろん、答案の処理や合格者の発表についての理解が進むに違いない。そして、そのなかで判明した事柄を、ある受験生の口を借りて語らせるのである。たとえばある年の科挙に首席合格(状元及第)しエリート官僚としての将来が約束された若者が語る、としてもよいかもしれない。

省試についてはこのようになるであろうか。

「私がお聞きするところでは皆さんが受ける試験には、たいてい問題用紙があるとか。しかし、私が受験した省試には問題用紙はありません。では、どのようにして出題されるか。……貢院という小部屋に受験生がそろって、各小部屋の前のブラインドがおろされます。そして問題文が管理棟の掲示板に大きく掲げられるのです。私たちはブラインドの隙間から問題を確認し解答を始めることになります……。」

さらに殿試についてはこうだろうか。

「殿試において皇帝陛下御自身が面接をされるということを授業で習ったのではないのでしょうか。おそらく皆さんは面接試験と聞くと、試験場で突然面接官から難問をぶつけられ、受験生がしどろもどろで答えるといった風景を思い浮かべるのかもしれませんが。殿試については少し違うのですよ。……受験生は集合場所(集英殿)で席を割り当てられ、ここで印刷された面接のテーマを与えられます。つまりあらかじめ解答を用意できるわけです。ただし、会場に持ち込めるのは筆記用具だけなのであくまで自分の知識が頼りなのですが。……こ

の日は昼食も出て、午後には試験が終わります。』

【授業実施上のポイント】

「なりきり」のハードルが高そうな時、授業者がまず何かになりきってお手本をみせるのも有効である。これを「ティーチャー・イン・ロール (Teacher in Role)」(先生も演技)という。(3)を題材にしてこのように語りだすこともできる。

「私が乗り組んでいる貿易船はジャンクといひまして海外との貿易に従事しております。…泉州の港を出港し大海原に出ると、天候が急変し風雨が激しくなることも多いのです。そんな時はコンパス(針盤)だけが頼りです。航海長がこれを操り少しの誤差も生じません……。」

あわせて『新世界史』p.115掲載のジャンク船の写真や問いを紹介するとよいだろう。

もう1つが(6)だ。「巻十八」には南宋のおこなった社会福祉政策が紹介されている。①国家的祝賀にちなんだ特別な財政支出(賃貸住宅への家賃補助など)、②凶作時における備蓄米放出、③施薬院における公的医療、④慈幼局での孤児養育、⑤老人・病人・経済的困窮者に対する養濟院の救済活動、⑥引き取り手のない遺体を漏沢園に埋葬など、それぞれの活動内容とスタッフさらに経費までが詳細に述べられている(ちなみに「漏沢園」については徽宗との関係が明らかになってきており、亡国の皇帝に対する評価が変化しているという)。「巻十八」のこの部分と出あうことにより、エリート官僚たちが栄華を極めていた都臨安という同じ空間に多くの困窮者が日々の生活にあえいでいたのだという当たり前の事実を生徒たちは気づくに違いない。人物設定は難しいが、どのような人物とするにせよ、なぜそうした境遇におちいったのかを想像してもらうだけでも大きな意味があるだろう。たとえば外征で重い障害を負った元兵士となるかもしれない、あるいは飢饉と疫病で職を失った元佃戸か。そうした人物たちを設定することで南宋社会が抱えていた問題を考えるよい機会と

なるはずである。

参考文献

呉自牧(梅原郁訳注)『夢梁録——南宋臨安繁昌記』(1～3、東洋文庫674・676・681、平凡社、2000年)

孟元老(入矢義高・梅原郁訳注)『東京夢華録——宋代の都市と生活』(東洋文庫598、平凡社、1996年)

渡部淳『アクティブ・ラーニングとは何か』(岩波新書1823、岩波書店、2020年)

(きしもと・つぐし／元鳥取県立鳥取西高等学校教諭)